# 令和元年度第１回　市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議　会議録

日　時　　令和元年 5 月 31 日（金）　10：00～12：00

場　所　　姫路市市民会館　５階　第 11 会議室

出席者　　委員７名　　事務局５名

（委員）　藤本 真里　座長　　米谷 啓和　副座長　　大塚 優子　委員
安積　英孝　委員　　大森　正雄 委員　　橋　正人　委員
福永　強　委員

（事務局）　市民参画部　平石部長、市民活動推進課　藤保課長、
市民活動・ボランティアサポートセンター　佃所長　岸本主任　田代主任

次　第

１　開会

２　議事

（１）平成３０年度事業報告について

（２）令和元年度事業計画について

（３）第７回ひめじおんまつりの実施報告について

３　閉会

会議の進行記録（要点記載）

委　員：　今年度はセンターの 10 周年という区切りの年なので、他のメンバーではできないこと残せないことを何かやりたいなと思っている。

（平成３０年度事業報告について）
事務局：　資料１　平成３０年度事業報告について説明

委　員：　個人ボランティアの数が減少傾向である。これは積極的に「私は辞める」と申告してくるものか。

事務局：　高齢の親の面倒を見なければいけないとか、学生でもう姫路にいないので辞めるというようなことはある。

事務局：　昨年度末に、郵便が届かない方達の数を整理したので、減少している。何ヶ月も郵便が届かない状態が続いた方について整理したが、連絡があればもちろん再登録する。実際の数字で考えると、実質活動されている方の数はだいたい横ばいかと思われる。

委　員：　夏休みボランティア体験学習の実施について、どういう団体が受け入れて、例えば学生さんからフィードバックをもらっているか等を詳しく教えてほしい。

事務局:　受け入れ団体は 11 団体で、その分野は様々。例えば福祉施設を運営している団体、自然環境分野で環境づくりをしている団体、地域づくりをされている団体など、幅広い分野の団体に参加いただいた。学生参加者、受け入れ団体ともにアンケートをとっており、特に問題だと思うような意見はなかったかと思う。ただ１回目なので、事務局として問題だったと思う点はあった。例えば、受け入れ団体に偏りが出たという点で、今年度は解消するよう努力したい。なお、現段階で１０団体から受け入れの申し出があり、まだ数団体からの申し出を見込んでいるので、昨年と比べて同じか、少し増えると思う。

委　員：　受け入れ団体側にとっては、若い人の感覚や意見、動き方を取り入れるいい機会であり、学生側から見ると、社会との接点を増やしていく良い機会なので、昨年度の内容をフィードバックして、双方にとって良い機会にしてほしい。

委　員：　活動相談の中で、電話相談の件数が５年分出ているが、見事に隔年で件数が大き

く増減している。何か原因があるのか。

事務局：　印象としてはそんなに数は変わっていないように思うが、実際数字にするとこうなっており、こういう傾向があるとは言いづらい。ただ、相談で最近増えてきたのは、病院に行きたいので付き添いのボランティアはないかといった、対応に困るような相談が増えてきている印象。

事務局：　目の不自由な方で、姫路に来たので観光案内してほしいとか、病気の母親からうちに来て障害を持つ子供の面倒を見てほしいというような相談で、有償のサービスならあるだろうが、無償のボランティアはなかなか紹介しにくい。また福祉の制度に乗らないような方もおり、解決に悩むようなケースがある。

委　員：　人材育成の中の講座に関して、「ひめじの魅力もっと再発見講座」が参加人数１５人というのは、あまりにも少ない。姫路の魅力を紹介する内容だったのか、魅力の見つけ方のノウハウを教える内容だったのか、教えてほしい。

事務局：　これは、実際まち歩きをして、どんなボランティアなのか実体験していただく講座だった。ここ数年の傾向としては、ボランティアしようという講座にはあまり人が集まらず、ボランティア色を消した楽しそうな講座は多数応募がある。それは、我々がどう考えていくかだが、間口を広げて人を呼ぶことを重視するならボランティア色を消してでも楽しい講座をすることになるし、参加者が少なくても人材育成に踏み込んだ専門的な講座をひらくこともできる。昨年度は、ボランティアを実体験してもらうという視点でこの講座をしたが、やはり人の集まりが悪かった。この運営会議でご意見をいただいて、もっと間口を広げるような講座をしたほうが良いということであれば、そういった講座も企画していく。

委　員：　ボランティアガイドそのものが姫路の観光資源になればというのが私の理想だが。

委　員：　昨年度電話相談が多かったようだが、これは市民活動に感心が高まっていたり、相談先として頼りにされていると捉えるのか、それとも市民活動に課題が生じていることであり、大きく見れば問題だと解釈するのか、また業務に関しての負荷がどうなのかを教えてほしい。

事務局：　件数で考えた時、あまりにも多いと困っている方に対応できていないのかということになるし、少ないと市民活動が活発でなくなっているのではと、いろいろなとらえ方があるので、ある程度の枠に数字が入っていれば問題はないのではという認

識を持っている。

（令和元年度事業計画について）

事務局：　資料２　令和元年度事業計画について説明

委　員：　要望になってしまうが。私の住む地域では、人口減少や、高齢化がすすんでおり、なんとかしなければという機運は盛り上がっている。そんな中、公民館が地域活動の拠点として衣替えする方向で制度設計をしていると聞いたので、是非、その拠点をしっかりしたものにしてほしい。センターも１０年ということで、その役割は市の中心部の活動をサポートしてきているような気配がある。しかし、周辺が自治機能もままならない状況で、その反省から機運は高まってきているので、それに火をつけるような活動をお願いしたい。

事務局：　センターというよりは市民活動推進課本体の話になるが、平成３０年の３月に小学校区単位の地域活動の場のあり方について、市民局が中心となって、庁内で検討した報告書を作成した。その中で市から３つの提案をしている。まず、地域活動の各種地縁団体、つまり自治会や老人会、婦人会、PTA などにおいて成り手不足や、活動が停滞気味になっている地域があるので、地域活動を持続可能なものにしていかなければならないということ。次に公民館をはじめとする市の公共施設を地域活動の拠点として使うこと。そして市の内部体制、組織体制として地域をサポートしていく必要があること、その３つである。小学校区にほぼ１つずつある市立の公民館は、現在、社会教育の場として講座を中心に使われている。それを、社会教育も残しつつ、地域活動の拠点として活用していくことを想定し、地区連合自治会を中心とした団体に対して実証実験の公募をしようと考えている。今年度から 2 カ年度の計画で、概ね３～５地区を選定し、組織のあり方や地域での課題を市職員もサポートしながら会議で話し合い、かつ公民館の活用方法等を検討するもの。理想的なモデルが出てくれば、それを全市に広めていきたいが、その中で、センターのあり方の一つとして、周辺地域に対するサポートや、つなぎという役割も考えていきたい。

委　員：　重要な課題。センターでもモデル地区が決まったら、そこを意識してサポートできることもあるはず。従来、センターは地域というよりテーマ型の活動を支援しているところがあるので、今後はモデル地区を意識する必要がある。今年度はどこが対象地域なのか、例えば地図に書いて貼っておくなどして、関係することがあればつなぐというようにしては。

委　員：　公民館は教育委員会の管轄で、センターとは別ライン。そして自治会は市民活動推進課が窓口になっている。その状況で、実証実験をやろうとしている。センターと自治会が、つながらなくて良いのか。というのも、提案型協働事業で、NPO と自治会をつなぐようなテーマが出たが、連携がとれていないところもありなかなかうまくいかなかった。自治会とこのセンターの活動とのあり方は何か目指しているところがあって、今回の事業計画に反映できるようなことがあるのか。また、次の２０年への長期計画、中期計画を考えるにあたって、そういったことを取り込んでいくのか。

事務局：　今回、地域活動の場の充実がテーマだが、最終的には地域で考える力のサポートや、周辺の環境作りのサポートをすることが目標である。地域として考える時、自治会が中心だが、婦人会、子供会、PTA、消防団、また、地域の企業や、NPO など、いろいろな活動をされているところがある。それは地域によって様々なので、市として強制的につなぐことは考えておらず、地域全体で協議会的にやるという場合に、サポートする形を想定している。今後、実証実験のモデル地区ができていった時に、場合によってはセンターとして何か関わる可能性もある。地域にあるボランティア団体、NPO というのは想定の枠の中にあるので、可能な地域があればサポートしていきたいと考える。

委　員：　公民館は活動も人材育成もがんばっているが、本庁の施策と連携しておらず、本庁が重複するような人材育成の事業をしていることもあるので、そこを連携させるなど、いろいろな実験にしてほしい。また、公民館の職員がもっと地域との関わりを深めて、地域の人と何か一緒にやる意識を持ってほしいし、逆に地域の側も、例えば公民館の運営を引き受けるとか。いつまでも、公民館は市がやるものという意識ではなくて、市との連携もするけど、主は地域だという意識になっていけばと思う。

委　員：　今は公民館の所管が教育委員会だが、次は市民局になるのか？

事務局：　今は、教育委員会にあるが、この度連携をしていくにあたって職員に対してお互いに兼務をかけている。この実験的な取り組みがそのままスムーズに行って、地域の活動を主眼に置くようになれば、市民局の方の所管にというような話の流れもある。

委　員：　姫路は広いので、中心部とその周辺というのは全然違う印象。その中で、共通の問題は、災害だと思う。公民館活動の中で災害に備えた活動にセンターが関わって、

公民館の活動を通しての関わりができたらいいのではと思う。

事務局：　公民館では、年間計画を作って、館長が地域と相談しながら教養講座とか地域講座を組んでいる。近年災害に対する意識が高まっており、かつ市立の公民館は避難所に指定されていることもあることから、災害に関する講座を計画したり、地域の方と一緒に公民館の中で避難訓練をしているケースも有る。地域の方の意識としても、いざという時の避難所として公民館があるというのは、周知されてきたかと思う。

委　員：　私の住んでいる地域は公民館がないので、その役割は別の施設だが、その施設が主体となって動くということはなく､やはり連合自治会がみんなを引っ張っている。それは公民館がある地域でも同じだと思うので、連合を意識してやっていく必要もあるかと思う。ただ、問題なのは地域の住民だけという意識になっており、そこに垣根があると感じる。今後、連合とセンターが何か関わっていけることがあれば良いと考える。

委　員：　この実証実験にあたって、市民活動、ボランティア活動、福祉活動、地域貢献、社会貢献、なかなか線引きが難しいので、内容的に整理する必要がある。地域包括支援課が、困りごとを地域から抽出して、それを地域の活動や社会資源を使いながらより良い形になるような話し合いを地区ごとに展開している。そこでは、市役所職員、包括支援センター職員、社協職員、保健センター職員などが一緒になって進めているので、この実証実験と類似するような点はないのかと。また、ちょっとした困り事に対応するボランティア「あんしんサポーター」の養成育成という制度もあるので、総合的に整備していくべきかと思う。

事務局：　その点は、この実験的な取り組みのひとつの課題である。地域包括支援課、市民局、福祉、消防、危機管理、社協、全体として横の連携がなく、それぞれの課が地域にお願いするので、地元の負担になっているというのが現状。それを解決するというところも一つの目標で、窓口をできるだけ整理をして、地域と行政がやり取りできる形を作っていきたいと考えているので、連携の協力をお願いしたい。

委　員：　社協には社協支部があり、同じ自治会単位なので約半分くらいの地域で連合自治会長が社協の支部長を兼務している。様々な内容で地域に入っていかなければいけないということは同じなので、連携できる部分はしていきたい。

委　員：　前回、１０周年に関わって記念誌を作ったらどうか、１０年の区切りの情報を整

理しておいたほうがよいという意見が多く出ていたが、それについてはどうか。１０年となるとこれまでの情報の蓄積がすごいと思うので、予算をかけずとも、誰が見てもわかるように情報の整理はしておいた方が良いと思う。

事務局：　明日発行の通信で、１０周年の特集をしている。それに伴い、写真や、情報の整理はほぼ終わっている。まだまだ情報があるのでさらにいい形にして、ひめじおんまつりで展示したり、ホームページにも掲載したいと考えている。

委　員：　ひめじおんまつりの予算を増やすことはできないか。資料にあるひめじおんまつりの経費は、マイナスになっていてセンター事務費から補填している。これからもこの状態が続くのであれば、ひめじおんまつりが続かないのではないかと、切に感じる。

事務局：　予算要求はしているが、なかなか予算がつかない。財政課としては優先順位が低いのかなという印象。

委　員：　この１０周年の区切りに成果を形に表していくことで、その優先順位を少しでも上げることはできないか。私達実行委員も参加団体も全員ボランティアなので、その予算が私たちに回ってくるというわけではない。しかし、将来、予算がなくてステージが作れないというようなことになると、すごく残念に思う。この１０年を区切りに、予算のとり方をもう少し見直してもらえたら、ひめじおんまつりの実行委員としてうれしいし、次の実行委員長にも引き渡しやすい。また、１０周年の記念シンポジウムは確定なのか。

事務局：　今年度の計画として、１０周年の記念シンポジウムを予定しており、その開催時期が未確定。ひめじおんまつりも今年度で第８回、２年度後には第１０回とこれもまた節目を迎る。今年度はセンターの１０周年のあゆみということで、まず皮切りにボランティア通信で紹介し、ひめじおんまつりやシンポジウムの方でさらに情報を載せていきたい。それを踏まえた上で、再来年度の第１０回ひめじおんまつりを目指して盛り上げていくつもりで、案を考えて財政の方へ要求していきたい。

委　員：　１０周年の記念を１日のイベントで終わらせるよりも、この１０年の間に表面には出てこないが、いろいろやってきたことを記録に残すことが大事なのではないかと思う。華やかなスポットライトを浴びる人も必要だが、それを支えてきた人達に対して何かと考えた時に記念誌がよいと思うが。

委　員:　記念誌については、前の会議からも出ている。これまでの１０周年を表現する時、これまでにこの事業やイベントに、どんな経緯や苦労があったのかは、記念誌として物語のように細かく書かないと伝わらないのでは。

ひめじおんまつりの歴史を綴るだけでも価値があるので、ひめじおんまつりの実行委員会で記念誌を作るのはどうか。ひめじおんまつりの実行委員会で、全く新規事業として予算要求する方法もある。その場合、実行委員会が主体で作り上げていくことになり、行政は予算のサポートという形になるが。実行委員の負担が大きいという側面もあるので、１０周年は無理でも、１５周年でやるという考えもある。

行政の事業は、周年記念の行事は集客力ある人を呼んで１日だけシンポジウムをして終わりという傾向がある。ただ、それは市民活動を続けている方からすると、それが自分たちの１０年ではないと思う方もあるはず。そういう価値観をこの機会に学んで、そして肝に銘じて今後の周年記念事業のあり方を考えてほしい。

委　員：　実行委員会から予算の提案はしてないのか、そういう仕組ではないのか。

委　員：　そういう仕組にはなってない。

委　員：　そこを変えたらいいのでは。実行委員会から、第９回はこれをやるために予算はこれだけ必要というような形で。そういう具体の案がないと、センターも予算要求しにくいのではないかなと。

委　員：　実行委員会の形式として、これは独立した主組織でもない。実行委員会形式ではあるが、市も入っているので、それを提案するのはなかなか難しい。

委　員：　予算関係はすべて市役所でやっているので、その考え方で実行委員会が予算要求するのはなかなか難しいとは思う。なので、細かい予算要求は難しくても、ひとつ大きなテーマでこういうことをやりたいという提案なら可能性はあるかと。実行委員会で、お金のことまでをやるのは大変か？

委　員：　実行委員会の形態は、基本的に単年度のものなので難しい。

委　員：　役所を通すといろいろな制約やシステムがあって印刷発注や物品購入の方法も制限されるが、実行委員会が予算を持つと、予算執行はしやすくなる。また、イベント業者に頼んでいることの中に自分たちでできることもあるので、節約できる部分もあるのでは。反面、実行委員会で執行する場合は、市や市民からのチェック等々に対応することまでやらないといけないので作業などは大変ではある。

委　員：　ひめじおんまつり一年目に出来る限り自分たちでやる形式をとったため、予算が少なくなった。最初に業者に依頼するつもりで予算をつけていたら、違っていたと聞いている。また、第１回目は、実行委員と前日手伝いのボランティアだけで、設営をしたらしいが、それはかなり負担だったと聞く。女性も多いので重労働で疲弊するようなあり方は、実行委員の役割としての意味が違ってくる。実行委員としては、そういう部分にしっかりと支払いできるだけの予算がほしいだけで、需用費のポスター代とかチラシ代などを求めるつもりではない。設営等の予算だけしっかりとあれば、実行委員としてもそこまで気をもまずに、運営に専念して将来的にも携われるのではと思う。

委　員：　実行委員が疲弊するような過度な部分は、しないと決めておくのはどうか。中心メンバーが変わらないのだろうから、年が経てば経つほど高齢化して、ますます重労働は大変になる。

委　員：　予算の拡大については、もうひとつ理由があり、個人ボランティアをどうにか増やしたいという思いがある。現在の実行委員も事務局も、知り合いにしか声をかけられないので、パイが広がらないと、実行委員になってくれる成り手も吸い上げられない。そういう意味でも、予算をもう少し広げてもらって、そういう活動にもお金をかけてもらいたい。

委　員：　今、教育委員会で、小中学校の適正規模の検討の審議会がある。複式学級である小学校を統合するとか、逆に生徒を増やすような特別な制度を入れるというような議論になっているが、どうしても地域の活力とか、自治会がもっと地域拠点活動をという話になるため、教育委員会の管轄外になり、なかなか次に進みにくいと感じている。教育委員会からは自治会の活動や市民自治の方に手を出しにくいようなので、今年の事業計画の中で何か学校を絡めるようなボランティア、市民活動をサポートできることがあればと思っている。具体的には、夏休みボランティア活動の実施の中で、小中学校の花壇の整備など、学校自体が学生ボランティアの受け皿にならないかと思う。もう一つは、シンポジウムの件で、生徒の少ない学校ほど地域との連携を図ろうとしているが、自治会とつながっているかというと、そうでもない。１０周年のシンポジウムや、ひめじおんまつりの情報を校長会のような場で伝えてはどうか。教育委員会の方に、センターや課の方から働きかけを事業としてやれればなと思う。

委　員：　教育委員会に提案しても、それは教育委員会の課題ではないというのは具体的に

は？

委　員：　小学生が減り複式学級になると、教育の機会や体験が減り、また職員の配置にも問題が出る。そこで子供を増やすことを考えると、地域との親交を図ることによって人の移住を活発にしたり、子供や孫がそこで生活できるための職場が必要という議論になり、教育委員会の話でなくなる。

委　員：　そうなると、まちづくりになる。

委　員：　将来的な人口減少の推移を考えると、単なる統合では無理がある。そうなると、審議会では出口がないので、市民局の方からアプローチしてほしい。それをこの事業計画の中でも、学校への働きかけという形でできるところはやれたらなと思う。

委　員：　この間ひめじおんまつりに行って感じたが。高校生、中学生を見てると、礼儀正しく姿勢が素直で、ボランティア活動や市の行事に対して真摯に対応していたので、大人はそれに対してちゃんと応えなければいけないと思った。夏休みボランティア体験学習に関しても、何も知らずに現場に行くよりも、事前学習を行ってから団体へ引き継ぎ、その後フィードバックという手順をとる方が、学生にとっては大変良い。担当されている先生も地域のことを真剣に考えておられる方が多いので、良い関係を築くことで、長期に渡っていい効果が出てくるのではないかと思う。ひめじおんまつりについても同じことが言える。実行委員会がどのようにこのまつりを作り上げていくのか、その苦労やそれぞれの団体の背景などを是非伝えていくべきだと思う。そうすることで、いつか実行委員に加わりたいという声もあがるかもしれない。

（第７回ひめじおんまつりについて）

事務局：　資料３　第７回じめじおんまつりについて説明

委　員：　このひめじおんまつりには、地域おこしなどをやっているグループなどの参加も可能か。

委　員：　前提条件として、参加者はひめじおんに登録していることが条件なので積極的に参加を促してほしい。

委　員：　登録するのが大変なのでは。

委　員：　登録は簡単で、審査も難しいわけではない。是非声掛けしていただきたい。

委　員：　地域おこしのために日本酒を作っているグループだが、ひめじおんまつりで日本酒を出すのが可能かどうか。

委　員：　活動内容をパネルにするとか、そういう方法もある。

委　員：　日本酒の提供は難しいが、実物を置いて展示なら可能。

委　員：　是非登録団体になって参加してほしい。登録団体には、印刷室の利用によって安価で印刷できるなどのサポートもある。

委　員：　そういう団体は、ボランティアでやろうという意識よりも、自分たちも楽しんで地域を盛り上げている。

委　員：　そういう人達が、興味を示さないのはなぜか。知らないし、メリットをあまり感じられないのだろう。

委　員：　センターの、登録の呼びかけというのはどのようにしているのか。

事務局：　ホームページとか冊子とか。通信を公民館に置いたり、学校への送付、公民館長会などでも PR している。

事務局：　通信は２５００部ほど送付している。インターネットへの掲載や、各種イベントや説明会などに出向くときにも必ずセンターの PR をしている。

委　員：　ひめじおんまつりそのものも、皆さんに活動を知ってもらう目的がある。

委　員：　アンケートを見ると、知っている人しか知らないのかなという答えもあるので、それをどう捉えるか。不特定多数に周知しても、参加者や来場者はあまり増えないのではないかと思う。また、参加団体からのアンケートに広報が不十分という意見があるが、逆に参加団体が一番の広報部隊という感覚を持っていただくように実行委員や事務局が呼びかけしなければと感じた。参加している人のその先に、やってみたい人がいるはず。チラシでの広い周知も大事だが、確実に人を呼び込むには口コミのほうが効果的。

委　員：　参加団体という言葉を使うと参加している側という感覚になるので、アンバサダーなど違う表現にするという手もある。

委　員：　アンバサダーという英語は少し馴染みがないが、確かに表現は大事。

委　員：　団体によりけりではあるが、充てがわれてるという意識を持っている団体もある。そういう団体はなかなか前を向いていない。私も、参加団体に説明をするのだが、その意識を持ってもらうように話をする。

委　員：　出る人にひめじおんまつりの目的とかを簡単にカードにして配る。広報するのはあなただというような、何かポリシーを示す簡単なカードを毎回配ってはどうか。

委　員：　そういうような事はしているのだが。チラシの配布数のアンケートなどもとって、そういった動機づけもしている。

委　員：　何か考えて提案したい。冊子になると読まれないので、自分たちが主催団体なんだと感じるような、短く、目を引くような形にしたい。

委　員：　ボランティアをしている人は、スポットライトを浴びようとかそういう意識ではなく、地道にやっている人たち。でも、そういう人たちを何かの場で出してあげるというのが、このまつり。自治会とかは、地域に道路や橋をつけてくれということを一生懸命やっているし、それ以外の地域にあったニーズを組み当てるのが、こういう市民活動をしている人だと思う。

委　員：　災害時には自治会単位になることが多いが、それを少し広げてひめじおんまつりのような集まりで、出会って顔見知りをつくると、何かあったときにも役に立つ。例えば、どこかの公民館で全く知らない人ばかりの中で寝泊まりするような時に、ひめじおんまつりで知り合った人がいたら、薄いつながりでも感じられる。そういうきっかけをひめじおんまつりが担えるのではと思う。

委　員：　登録が面倒だという団体があるのなら、ひめじおんまつりに招待枠を設けて、参加してもらうというのはどうか。登録するのにハードルがあるならまずは参加して様子を見てもらってから、登録していただいても良いのでは。

委　員：　当日登録はやっているのか。

委　員：　ブースを設けているわけではないが、3階のセンターで対応している。
　前年度は、補助金情報の申請相談も行った。実績は1件だったが、増えていく要素もあるかと思う。また、学生ボランティアに関しては、大変いきいきと活動してくれた。学生側からすると大人達と同じ場で一緒の空気感を感じてやっていくことが大事なことだし、見ていて面白いと感じた。逆に大人から見ても若い学生達がいるだけで華やかになり、みんな活力を感じていたので、次回もできるだけ学校に声をかけて１０代の若い子たちに広めていく活動をしたいと話している。

委　員：　学生たちは、価値観が曇っておらず希望に溢れた目で、大人たちの活動を見ている。むしろ大人たちの方が冷めてたりするので、背筋が伸びる。是非、彼らにひめじおんまつりの背景などを事前にお話ししたいと思う。

委　員：　来場者数について、プログラム配布数は約１７００人、アンケートの回収者数は２１６名、そしてアンケート結果では人が少ないという意見。実際はどの数字で見るべきか。

事務局：　参加団体の人数、当日ボランティアの数、当日のホールの人数、展示室をまわっていた方の数、パンフレットを渡した数、すべて総合して出した数字が１７００人。厳密に言うと、重複してカウントされている部分もある。

委　員：　となると、アンケート回収の２１６人を基準にして、あとはプラス何百と推定するということで。

委　員：　こういったボランティアや市民活動がないと、社会が成り立っていかないので、センターもそういう意識を持って社会をリードしていくようになればよいと思う。